

目標達成計画

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。

目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	18 23 26 27 41	コロナ禍で制限されることが多い中でも、利用者を介護される人ではなく、地域の中で生活してきた目上の方であり、共に暮らす人として、その方の強みを活かしながら自立支援をするという視点が不十分である。 2024年1月1日の能登半島地震により被災し、かほく市に集団避難している。被災直後より、本人のできることを生かせるようになってきたが、馴染みの関係というグループホームの大切なコンセプトは、ボランティアが頼りであり、ここに自立支援を根付かせるには働きかけが必要である。	利用者が『快』『やりがい』『自身の価値』が感じられるようにICFの活動と参加を盛り込み、利用者が持っている強みを活かしつつ、自立支援できるようケアプランを作成できる体制をつくり、かかわる人全てで実施できるようになる。	①本人の強みをアセスメントし、ケアプランに盛り込む。 ②これまで担ってきた本人の誇りとなっていることや仕事などを活かしたり、再体験できる場面を考える。また、そのために周囲が協力する場面をつくって、共同の力を活かす。 ③記録はケアプラン実行の効果が分かるように記載する。(言葉・表情等) ④ボランティアとも共有しひなたぼっこの取り組みを深化させる	6か月
2	18 19 20 21	職員自身が先行きがわからず、地震後の片づけや制度の利用などに多くの時間がさかれ、心身ともに疲れている。今後どれだけの職員が残るかもわからない状態だが、家族は輪島に帰ってきてほしいという願いをもっている。家族にも協力を得て、グループホームのことをよく知ってもらう必要がある。	輪島に戻って、グループホームにおいて、利用者が主体であり、私たちは生活支援をすることが仕事であるという原点を大切に、ひなたぼっこらしさを取り戻せるようになる。外部の人とも共有する。	①日常の業務をただ職員がこなす仕事としないで、どう利用者と一緒に日常生活を営むかの視点で、見直していく。 ②それぞれのできることを活かして、日常の生活場面で利用者が活躍してもらうことを増やす。(ケアプランに組み込む) ③ケアプランに、個別にとるコミュニケーションの内容を具体的に記載し、その人がゆったりと話しを聞いてもらえた、寄り添ってもらえたという安心感が得られるケアを行う。利用者同志の会話も、お互いをポジティブに感じられるものになるようにサポートする。 ④外部の方の訪問の機会を増やす。 ⑤家族との交流を増やし、互いのしんどさを認め合えるようになる。	1年間
3	6 7 13 40	利用者やボランティアに対して馴れ馴れしい言葉使いになることがみられる。	利用者に対して尊厳を持って関わる事が出来るようになる。目上の方に対する言葉使いや不適切ケアに注意しプライバシーの配慮が出来るようになる。各人がアンガーマネジメントを意識し、自己覚知しながら自分のケアを見直せるようになる。	①職員の申し送り後に、ひなたぼっこ虐待防止行動指針の文章の読み合わせをする。 ②カンファレンスを開けるようにしコンプライアンスルールの読み合わせをする。 ③感染状況や復興状況をみながら、運営推進会議などを再開し、自分たちの状態を点検していく。 ④ボランティアの意見も聞いて、より高いケアを実現する。 ⑤アサーションの学習会をはじめ、コミュニケーションを検証する機会をつくる。	1年間

注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入して下さい。